紅陵に命燃ゆ

文・皿木喜久　題字・藤渡辰信

日本への危機感で聖地巡礼

中国へ渡りムスリムに

昨年11月、民主党の小沢一郎幹事長（当時）が、キリスト教やイスラム教を批判して物議を醸したことがある。高野山の金剛峯寺を訪ねた後、記者団に対しこう語ったのだ。

「キリスト教は排他的で独善的な宗教だ。キリスト教を背景とした欧米社会は行き詰まっている。イスラム教もキリスト教よりましだが、排他的だ」

仏教寺院を訪ねた後のことだから、多分に仏教関係者に対するリップサービスの面もあったのだろう。だが同時に、多神教の世界に慣れ親しんできた日本人のキリスト教、イスラム教という一神教に対する「違和感」のようなものの表れだったとも言える。

それでもキリスト教の方は16世紀にフランシスコ・ザビエルがきて、布教が始まり、江戸時代には「隠れキリシタン」が信仰を守った。明治になり信仰の自由が保障されると、欧米から多くの宣教師たちが来日した。

現在信者数はさほど多くなくとも、全国に教会やキリスト教系の学校がある。日本人との接点は意外なほど多いと言える。

これに対し、イスラム教に対する日本人の馴染みは薄い。

初めて日本人のムスリム（イスラム教信者）が誕生したのは明治時代だというが、現在の日本人ムスリム数の推定は難しい。

その６　田中逸平とイスラム

在東京のサウジアラビア大使館文化部による『日本に生きるイスラーム―過去・現在・未来―』は、ラマダーン（断食）時のイスラムホームページへのアクセス数などから、「1万人を超えたぐらい」と割り出している。ほかにその10倍ほどの在留外国人のムスリムがいるといい、ようやく存在感も増しつつあるようだ。

だが、日本ではほとんど認知されていなかった大正時代に、イスラム教に入信、2回もメッカ（マッカ）への巡礼を行った日本人がいたことは、あまり知られていない。田中逸平である。

灼熱の地・メッカで修行

田中は明治33（1900）年に創立された台湾協会学校（現拓殖大学）の第1期生だ。日露戦争のさい、特別任務のため内蒙古の地で散った脇光三と同期だった。

少年時には父親の影響で神道禊教の修法を受け、キリスト教にも触れて聖書を通読するなど、さまざまな宗教との接点をもった。しかし明治35年、漢学者、服部宇之吉に従って北京に赴いたころから、中国に根づいていたイスラム教に関心を抱いた。

22年後の大正13年1月中国で入信、メッカに巡礼の旅にでる。その記録である著書『イスラム巡礼　白雲遊記』にこう記す。

「大日本武州小金井村一農夫の子たる余は、支那山東省済南府南大寺に於て、阿衡曹鳳麟先生に由り回教徒として入教することとなった」

済南は青島の西約300キロにある中国交通の要衝の町である。大正から昭和にかけ多くの日本人が住み、昭和3年には日本人9人が中国内戦の犠牲となる済南事件が起きている。田中はかつてここで「済南日報」という新聞を発行していた。阿衡とは中国語でイマーム（導師）のことだ。

中国内で修行した後、大正13年3月30日メッカ巡礼のため済南を出発する。5月8日には香港から仏船に乗り、シンガポールで英国の巡礼船に換え6月15日、アラビア半島のジッダに上陸した。そこから3日間、ラクダの旅でついに聖地に到着する。

50度を超す灼熱で、巡礼者らが次々死亡する中、メッカやその周辺で難行苦行の修行を1カ月近く続けた。再びジッダからシンガポール、長崎などを経て済南に帰り着いたのは11月5日のことだった（『白雲遊記』より）。

信仰や研究に大きな足跡

日本人でムスリムになったのもメッカに巡礼したのも田中が初めてではない。しかし、その後の日本におけるイスラム信仰や研究に与えた影響においては群を抜いているといえる。

自ら信仰にいたった経緯を多くの著作に残している。さらに田中のイスラム信仰が、当時の日本の社会状況に対する深い疑問から発しているからでもある。

「（田中が信仰に入った）大正時代は、大正デモクラシーが起こり、伝統的な日本文化がすたれていくと思えた。その中で伝統をひたすら守ろうというイスラムの信仰が新鮮に思えたのでしょう」

拓殖大学イスラーム研究所長の森伸生教授はそう指摘する。

田中の中には、「イスラムと神道との習合」という考えがあったといい、神道に関する著作も多い。また亡くなる9カ月前の昭和8年12月、神戸から2度目のメッカ巡礼に出発するに当たっては伊勢神宮に参拝している。

この田中の影響もあって、拓殖大学は他の大学に卓越して、多くのムスリムを輩出している。同大学の創立百年小史『世界に天駆けた夢と群像』によれば、平成12年に選ばれた宗教法人日本ムスリム協会の理事13人のうち8人が同大学の関係者だったという。

イスラムに強い関心を持ち、大正末から昭和の初めに拓殖大学で教鞭をとった大川周明の感化を受けた者もいた。さらに戦前アフガニスタンの日本公使館に勤務、戦後拓大に初めてイスラム関係の講座を設けた斎藤積平の教えを受け、そのパイプでエジプトのアズハル大学に留学した者もいる。

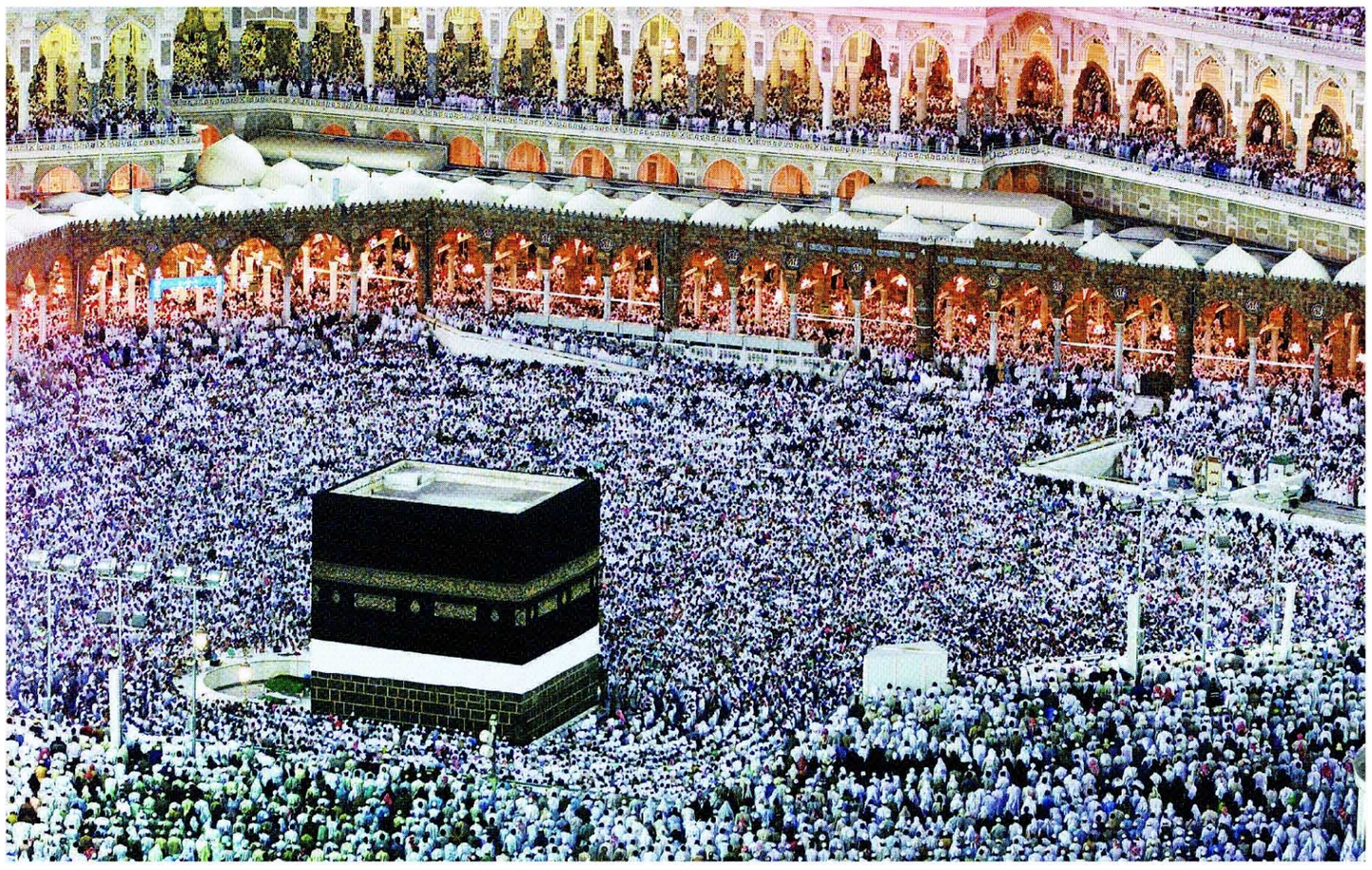
それぞれが実業界や学界を通じ日本とイスラム社会との接着剤の役割を果たしてきた。そして現在は大学の「イスラーム研究所」にとつながっている。

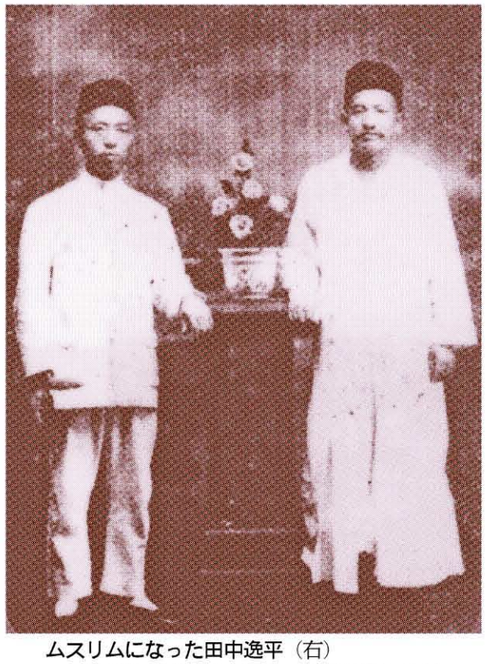
平成13（2001）年の「9・11」以来、世界的に、そして日本でもイスラム教に向けられる目は厳しくなってきている。

だが、世界に13億人以上と言われるイスラム社会を抜きにして21世紀以降の世界を生きていくことはできない。過激派の存在に惑わされないイスラム教の真実の姿を日本にどう伝えていくのか。日本のムスリムやイスラム研究者たちに課せられた責任は大きい。

（毎週土曜日掲載）

世界中から聖地メッカを訪れたイスラム教徒。田中逸平も大正から昭和にかけ２回の巡礼を行った
＝2002年２月18日（ロイター）





ムスリムになった田中逸平（右）
＝論創社『イスラム巡礼　白雲遊記』より

田中逸平（たなか・いっぺい）　明治15（1882）年、現在の東京都小金井市生まれ。明治33年、台湾協会学校入学。35年、中国大陸に渡り北京で中国思想などを研究。大正15年、大東文化学院（現大東文化大学）講師に就任。昭和８年、２回目のメッカ巡礼をはたしたあと９年９月15日死去。享年52。葬儀は日本で最初のイスラム葬として行われた。

大川周明とイスラム

東京大学で宗教学を専攻した大川は、西欧哲学からしだいに東洋哲学や日本の古典に傾斜、大正９（1920）年に教授となった拓殖大学では、植民史の授業などを通じアジア主義やアジアの解放を訴えた。それも狭い意味でのアジア主義ではなく、イスラムに関する研究も行い、多くの学生に影響を与えた。

イスラムへの関心は終生変わらなかった。先の大戦後にA級戦犯として極東軍事裁判にかけられ、精神に異常を来しているとして病院に入院させられた後、コーランを全訳したことで知られる。